

## 清水幾太郎の「内灘」

大久保 孝治

### 内灘事件

「石川県河北郡内灘村（現、内灘町）の米軍砲弾試射場をめぐる反対闘争。朝鮮戦争に際して日本は米軍用砲弾を製造していたが、米軍は1952年（昭和27）9月の日米合同委員会で砲弾試射場の提供を要求。政府（第4次吉田内閣）は内灘村砂丘地を選定、地元と交渉を開始したが、県議会などの反対運動により難航した。12月に4ヶ月の期限付でようやく接收、翌年3月試射が開始された。政府は6月2日試射場の継続使用を決定したため、着弾地点への座りこみ、北陸鉄道労組の米軍物資輸送拒否など反対運動が燃えあがり、デモ隊と警官隊の衝突へと発展したが、15日試射再開が強行された。その後条件派の台頭などにより、9月村長は試射場使用を承認した。11月の村長戦で反対派候補が敗れ、反対運動は終息に向かったが、その後の基地反対闘争に大きな影響を与えた。」（『日本史広辞典』山川出版、1997）

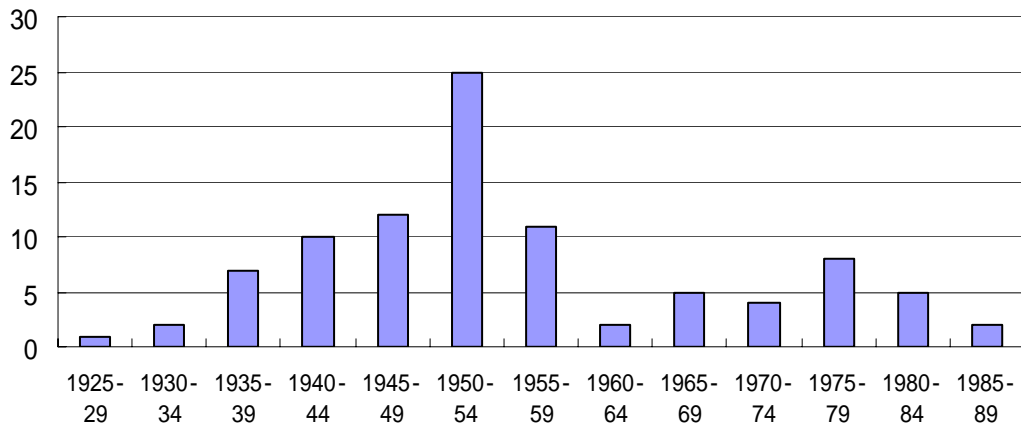
### 1 清水幾太郎の季節

清水幾太郎（1907 - 1988）はその81年の生涯に94冊の著作を出版した。ここでいう著作とは自著およびそれに順ずる著作のことで、編輯・監修作品（38冊）や訳書（33冊）は含まれない<sup>(1)</sup>。まさに驚くべき数字である。清水がこれほど多作の人であったのは、彼が売れっ子の、しかも息の長い「売文業者」（彼は自分をしばしばそう呼んだ）であったからである。『思想』、『世界』、『中央公論』、『諸君！』……彼の主要な活躍の舞台は時代とともに変化したが、雑誌の注文に応じて書いた文章を、後日、単行本にまとめて出版するというパターンは終生変わらなかった。

ただし、出版のペースは一様ではなかった。図1は清水の時期別の著作数の分布を示したものである。1950年代前半の数字（25冊）が抜きん出ていることがわかる。1950年代前半は、「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」（『世界』1949年3月号）に始まり、「安保闘争の『不幸な主役』 安保闘争はなぜ挫折したか・私小説風の総括」（『中央公論』1960年9月号）に終わる、「平和運動家」清水幾太郎の12年間の前半に相当する時期である。対日講和条約（1951年9月8日調印、1952年4月28日発効）を経て、敗戦以来6年8ヶ月にわたってGHQの統治下にあった日本が独立国として新たな歩みを開始したこの時期に、清水は大いに書き、そして大いに読まれた。戦後日本の政治の季節は、同時に、清水幾太

郎の季節でもあった。

図1 清水幾太郎の時期別著作数



しかし、清水の死後刊行された『清水幾太郎著作集』全19巻(講談社,1992~3)には「平和運動家」清水幾太郎の書いた文章はほとんど収められていない。「講和会議に寄す」(『世界』1951年10月号)、「内灘」(『世界』1953年9月号)、「われわれはモルモットではない ビキニの灰は今日も頭上に」(『中央公論』、1954年5月号)、「今こそ国会へ 請願のすすめ」(『世界』、1960年5月号) わずかにこの4篇が第10巻に収められているだけである。これは偶然ではなく、著作集の編者(清水礼子)の明確な意思によるものである。「困惑したのは、専ら運動のために書かれた文章の中に、掬い上げ、収録しておきたいものが殆どないことであった」(清水礼子 1992:440)。編者は著作集から時局的な文章を極力排することで、「平和運動家」としての清水ではなく、「学者」としての清水を後世に伝えたかったのであろう。それは偉大な父親に対する編者の思い入れとばかりはいえない。なぜならそれはほかでもない清水自身が晩年に企画して刊行直前で頓挫した幻の自撰著作集『清水幾太郎集』全11巻(新評論)において意図したことであったからである(2)。現実の著作集の編者は幻の著作集の編者の遺志を継いだのである。

運動の渦中で書かれた時局的な文章が著作集から排除された理由のひとつは、時間の経過の中での文章の「腐食」ということであった。清水は自伝の中で運動の時期を振り返ってこう書いている。「確かに、この間、私は夥しい量の文章を書いた。(中略)しかし、私の取り扱って来たテーマは、殆どすべてアクチュアルなものである。流れて行く時間の中に発生する大小の問題を論じている。私の文章は、流れて行く時間の歯車と噛み合ったものである。噛み合うことが文章の生命である。しかし、時間が更に流れて、大小の事件が忘れられて行くのに従って、これらの事件を扱った私の文章の短い生命も終わる。いくら一所懸命に書いても、また、一時は大いに意味があっても、それは瞬く間に腐食する。『業

績』として残りはしない」(清水 1975[1993]:431)。

もうひとつの、そしてより重要な理由は、文章の内容と著者の心理的距離の大きさである。「平和運動」と限らず、すべて運動というものに身を置いていると、その運動の約束に従わねばならない。(中略)どんな事件を論じる時でも、運動の目的に合致するように議論を進めねばならない。(中略)半分は自分で書いたが、他の半分は誰か他人が書いたような文章に見えて来る」(清水 1975[1993]:431-2)。通常、運動は個人が単独で行うものではない。運動を進めている諸団体に関わりながら、その一員として行うものである。したがって運動の渦中で書かれた文章は党派的な内容のものにならざるをえないだろう。文章の「腐食」がジャーナリストの運命であるとすれば、文章の「党派性」は運動家の運命である。前者を甘受した清水が後者にこだわったのは、清水が本質的に非党派的な人間、組織の中に自分を埋没させることができない人間だからである。「著者という人間は、恐らく他の誰よりも運動の本質とは距りのある精神の持主であったというべきかもしれない」(清水礼子 1992:439)という指摘は正鵠を射ている。

しかし、非党派的な人間であることといずれの党派にも属さない人生を送ることは同じではない。むしろ清水の人生は、非党派的な人間であるにもかかわらずではなく、まさにその故に、特定の党派に長期にわたって属することがなく(できず)、さまざまな党派の間を遍歴した人生としてとらえることができるだろう。その際、肝心なことは、どの党派に属しているときも、程度の差こそあれ、その党派と清水との間には心理的な距離があったということである。だから清水が生涯に属したさまざまな党派の思想的座標を単純につなげることによっては、清水の生涯にわたる思索の軌跡を表現することはできない。さまざまな党派の間を遍歴の軌跡は、各党派と清水との心理的距離(しかもそれは清水が各党派に所属していた期間の中で変化する)によって補正される必要がある。つまりは一筋縄ではいかないのだ。

本稿の目的は、1950年代前半という「売文業者」清水幾太郎にとっての活動のピークの時期に焦点を絞って、その時期に書かれた時局的な文章、ならびにその時期について回想的に書かれた文章を素材として、「談話」(平和問題談話会)から「闘争」(内灘闘争)に至る「平和運動家」清水幾太郎の論理と心理を少々詳しく検討することにある(3)。この作業は清水の生涯にわたる思索と行動の軌跡を描くという大きな仕事にとって基礎的な作業となるだろう。なぜなら清水がある集団に参加し、やがてその集団との心理的距離の故にそこから離脱していく過程は、おそらくは清水の人生の他の時期における集団との関係を理解する上で役立つはずだからである。自伝の「あとがき」の中で清水はこう書いている。「当たり前のことかもしれないが、約二年間、書き続けていくうちに、自分の行動のパターンというものがあって、それが繰返されているのに気づくようになった。(中略)到底、

誰かにお勧めできるようなパターンではない。しかし、私は、こういうパターンと一緒に生まれたのであろう」(清水 1975[1993]:497)。

## 2 学者たち

「平和運動家」清水幾太郎の出発点は、平和問題談話会が『世界』1949年3月号に発表した「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」である。この声明は、米ソの対立から第三次世界大戦の不安が増す中で1948年7月13日にユネスコが発表した「戦争を引き起こす緊張の原因についての8名の著名な社会科学者の声明」の日本版というべきものである。平和問題談話会は安倍能成、大内兵衛、仁科芳雄の三名を主導者として、当時の著名な50余名の学者が参加して結成された研究会だが、影のオーガナイザーは『世界』の編集長吉野源三郎で、岩波書店が平和問題談話会のスポンサーとあってよかった。吉野はこう回想している。「夏の終わりごろ、僕はそれ(ユネスコの声明 筆者注)を司令部のCIEから配給してきた文書の中に見つけた。そしてこれは非常に大きな問題になりうることだと思い、何人かの僕の友人でもあり、一緒に協力してくれた若い学者たちに見てもらった。みんな非常に感動して読んでくれました」(吉野 1976:255)。その「若い学者たち」の一人が清水(当時41歳)であった。清水は自伝の中で、1948年9月28日、熱海の岩波別荘で『ジャーナリズム』(岩波新書)を執筆中の清水のところへ吉野が訪ねてきて、ユネスコの声明を清水に見せたときのことを振り返ってこう書いている。「文章を丁寧に読み、吉野氏の話の聞いているうちに、事柄の大きさが判って来た。やがて、このタイプライター用紙三枚ばかりの文書が、それから十数年間に亙る私の生活の多くの部分を決定することになった。」(清水 1975[1993]:317)。

「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」は10項目からなる。各項目の要点を列挙すると、(1)戦争は天災のような自然現象ではなく、われわれの知性と努力によって防止できるものである。(2)平和は現状維持によって獲得されるものではなく、現実の積極的改造によって確立されるものである。(3)生産力の向上と資源の計画的利用によって最大限の社会正義を実現することは、戦争の防止と平和の確立の基礎的条件である。(4)生産力と資源において有利な地位にある国家が、後進国支配の政策の必要から、自国の象徴・神話・伝統を強制することが、戦争の勃発を促進してきた。(5)人種的不平等は戦争を誘発する一要素である。(6)東西二つの世界の平和的共存の条件が科学的に研究される必要がある。(7)世界の科学者は自由に意見を交換し、真理と福祉を目指して協力し合わねばならない。(8)交通通信手段の進歩は地球上の人類を結びつけ、彼らの間に了解と平和の道を開く。(9)将来の戦争は必然的に原子力戦争であり細菌戦である以上、一旦端緒が開か

れば人類は滅亡する。この点に関して各国の民衆および政治家を啓蒙することは科学者の任務である。(10) 平和の確立は民衆の科学的知識と倫理的意志に依存するから、われわれは平和のための教育に重大な意義を認める。

戦争の人為的性質の指摘から、平和教育の重要性の指摘まで、声明の内容は多岐にわたるが、多くの項目がユネスコ本部の声明を下敷きにしたもので、第6項の「二つの世界の平和的共存」という表現以外は、とくに目新しいことが述べられているわけではない。「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」が画期的だったのは、その内容ではなく、50余名の著名な学者たちが集団で声明を発表するという行為それ自体だった。彼らにそれをさせたのは、日本の軍国主義化の過程を阻止する役割を自分たちが果たせなかったこと(場合によってはその過程に加担さえしたこと)への悔恨であり、したがって日本を再び戦争へと進ませないために生き残った自分たちが何ごとかをせねばならないという使命感であったろう。さらにいえば、自分たちにはそれができるという自負もあつたに違いない。自然科学者ばかりでなく、哲学者、政治学者、法学者、経済学者、心理学者、社会学者、文学者からなる集団が「日本の科学者」と名乗っている点に、当時の「科学」に対する明るい信頼を読み取ることができる。

平和問題談話会は最初の声明から1年後、『世界』1950年3月号に「講和問題についての声明」を発表した。当時、日本はまだ連合軍の占領下にあつたが、諸外国との講和のあり方をめぐる議論が活発化していた。日本政府と西側諸国との間で進められていた対日講和交渉は、推進派(民主自由党 自由党)からは多数講和あるいは早期講和と呼ばれ、反対派(社会党・共産党)からは単独講和あるいは片面講和と呼ばれていた。「講和問題についての声明」は単独講和反対の立場(全面講和)に立つものであつた。最初の声明の中に「二つの世界の平和的共存」という理念が含まれる以上、平和問題談話会が全面講和を支持するのは当然である(4)。全面講和に加えて、「講和問題についての声明」には講和後の日本の中立不可侵、国連加入、軍事基地反対が含まれている。いずれも全面講和の思想の論理的帰結である。ただし、全面講和、中立不可侵、国連加入がどれも将来の出来事にかかわるものであり、したがって「会議室の平和運動」で済んでいたのに対して、軍事基地反対は、軍事基地がすでに現実の存在である以上、平和問題談話会のメンバーを「現場の平和運動」へと誘うものであつた。少なくとも論理的にはそうなるはずであつた。しかし、「講和問題についての声明」から3年後、北陸の小さな漁村を舞台に展開した最初の本格的な基地反対運動(内灘闘争)の現場に足を運んだのは清水以外にはいなかった。

ここに1枚のメモがある(図2 割愛)。1948年12月12日に明治記念館の大広間で開かれた平和問題談話会東西連合総会の席次が書かれたメモである。議長(安倍能成)や長老たちの座る上座のテーブルの後ろの事務局席に、清水は岩波雄二郎(岩波書店社長)や

吉野源三郎や関西地方の事務局を勤めていた久野収と一緒に座っている(5)。このメモに記された清水の席次は平和問題談話会における彼の立場を二つの意味で象徴するものである。

第一は、清水が実務的な能力において他のメンバーよりも抜きん出ていること。平和問題談話会の3回の声明はすべて清水の手になるものである。清水が起草し、起草委員会ならびに総会での検討、承認を経て、発表されたものである。清水は東西7つの部会すべて出席し、そこでの議論を汲み取り、声明へとまとめあげていった。それは多くの時間とエネルギーと文章の才を必要とする作業であった。清水の存在なくしては平和問題談話会の活動のありえないことは衆目の一致するところであった。『週刊朝日』1949年9月4日号の「顔」というコラムは、「ユネスコも仁科を会長に祭り上げているが事実上清水が独りでやっている」と棘のある口調で清水の活躍ぶりを評しているが、目立つ人物に対するこうしたまなざしは必ずしも談話会の外部にだけ存在したものではないだろう。

第二は、清水が一種の「仲間はずれ」のような立場に置かれていたこと。平和問題談話会のメンバーの大部分は大学の教員、それも国立大学の教員である。最大多数を占めるのは東京大学の教員(13名)で、次いで京都大学の教員(10名)である。これに対して清水の肩書は「二十世紀研究所長」であった。二十世紀研究所とは、終戦の年の12月に読売新聞社の論説委員を辞めた清水が、翌年2月、細入藤太郎(立教大学)、大河内一男(東京大学)らと一緒に始めた在野の研究機関、というよりも今風にいえばカルチャーセンターで、「二十世紀教室」という公開講座や叢書の出版を行っていたが、財政難のため、1948年の秋に事務局を閉鎖し、啓蒙活動は停止していた。清水はアカデミズムの内部の住人ではなく、アカデミズムとジャーナリズム、その二つの世界の接点に立つ境界人であった。

清水は1928年に社会学者を志して東京大学文学部社会学科に入学し、卒業後は副手として研究室に残ったが、『思想』や『唯物論研究』といった雑誌にマルクス主義的な立場からの社会学批判の論文を書いたことなどから主任教授の戸田貞三との折り合いが悪くなり、2年で研究室を去り、以後、フリーのジャーナリストや新聞社の論説委員として戦前・戦中を生きてきた。「私は、大学教授というものになる気持ちはなかった。東北帝大の集中講義も、昭和二十四年度でお断りする心算でいたし、あの頃は方々の大学から、教授になってくれ、という依頼が多かったが、みなお断りしていた。中には、学部長として来てくれ、学長として来てくれという話もあったけれども、すべてお断りした。生活は苦しいかもしれないが、フリーのジャーナリストとして生き、出来れば、多少アカデミックな著述も試みたいと考えていた」(清水 1975[1993]:326-7)。これは明治記念館での平和問題談話会東西連合総会から一月ほど経った頃に、安倍能成から学習院に来てほしいといわれたときのことを、清水が自伝の中で振り返って書いたものである。しかし、「大学教授というものに

なる気持ちはなかった」という彼の言葉を鵜呑みにすることはできない。公職追放となった新明正道の後任として東北大学教授となる話はかなりの程度まで決まっていたことである。鈴木広は日本社会学会の機関紙『社会学評論』に寄せた清水の追悼論文の中で次のように書いている。「決定し、決意していたこの話が、実現しなかったのは清水夫人が強硬に反対したからであるという。その反対の理由は、当時もなお、上野から以北は全くの田舎であり辺境であって、東京の町の子にとって、その都落ちは堪え難いものであったからである。このことは清水が九大に集中講義に来られた折、直接伺ったことである」(鈴木 1990:424)。教授になってくれという依頼は確かに多かったのだろう。学部長や学長として来てくれという話もきっとあったのだろう。しかし、おそらくそうした依頼は、戦後、全国各地に雨後の竹の子のように誕生した新制大学からのものがほとんどではなかったのだろうか。清水は「大学教授というものになる気持ちがなかった」のではなく、地方の(東京でも二流以下の)大学の教授というものになる気持ちがなかったのである。

自伝の中に引用されている日記の断片(清水は時間の経過による回想の歪みを抑えるため、当時の日記の引用という手法を駆使したのであろう)には、ときに談話会のメンバーに対する嫌悪が見られる。「何も彼も判り切ったことを一々議論せねばならぬバカらしさ。つくづく厭になる。早く軽薄な journalist に戻らう。田舎者は嫌いだ」「夕方より起草の会。田舎者多く、イライラするのみ」(清水 1975[1993]:341)。声明文の調整という骨の折れる仕事は、清水を疲れ、苛立たせた。鈴木は「清水にとっては京都も田舎であり、嫌いなのである」(鈴木 1990:423)とコメントしているが、「田舎者」という言葉は、談話会の近畿地方のメンバーに向けられたものというよりも、世間から隔絶された場所にいる大学教授たちに向けられたものと読むべきだろう。清水は、『婦人公論』1953年4月号の「インテリについて」の中で、「インテリ志望の人たちと現代の諸問題を話し合ったときの経験」について次のように書いている。「こういう人たちと、平和の問題などを話し合いますと、その人の口から、平和は結構だが、それを達成するには、かくかくの困難がある、というような話が出て来ます。私がいろいろと説いて、その困難は大したものではない、かくかくの方法で克服出来るだろうと答えますと、その人は、そうかもしれないが、もう一つ、別のこういう困難がある、と言います。何とかして、それを退治すると、しかし、こういう問題もある、と言い出す始末。私は同じような経験を何度か嘗めて来ております。その人は沢山の知識を持っています。随分勉強したのでしょう。しかし、その沢山の知識は平和の達成を妨げる困難の指摘にばかり活用されているのです」(清水 1953a:68)。この文章を書いたとき、清水は「インテリ志望の人たち」と平和問題談話会のメンバーたちを重ね合わせていたに違いない。こうした一種の「間接話法」は、自己の所属する集団について批判的に語る場合に、清水がしばしば用いたレトリックである。清水は自分たちが唱えた

全面講和論、およびその論理的帰結としての軍事基地反対運動に対する責任を感じていたし、その点において無責任な大学教授たちとは違う種類の人間として自分自身を意識していた。「次々に講演の依頼が来て、三分の一ぐらいは断りきれず、そのために方々を飛び廻ることになった。各地を飛び廻りながら、私は、自分が孤独になり悲壮になっていることに気づいていた。(中略)平和問題談話会の仲間は、それぞれ大学に戻り、彼らに会うことは稀になった。会うと、『やってますね』などと言われた。心の半分では『軽薄な journalist』に戻りたいと強く願いながら、他の半分は、私を或る一点に立たせていた。或いは、或る一本の線を歩かせていた」(清水 1975[1993]:345)。

### 3 読者たち

孤独で悲壮な「平和運動家」清水幾太郎を支えていたのは、彼の文章の読者たちであった。自伝の中で彼自らが紹介しているように(清水 1975[1993]:346) 1952年4月28日付の『図書新聞』に載った読者(大学生・高校生)調査のデータによれば、「どういう雑誌を愛読していますか」という質問に対する回答の第1位は『世界』であり、「どんな人に書かせたいか」という質問に対する回答の第1位は「清水幾太郎」であった。清水幾太郎編『聲なき民のこえ』(要書房、1951年)が出版された背景には、こうした清水の絶大な人気があった。この本は清水の「再軍備はいけない」(『婦人公論』1951年3月号)、「現代の魔術に抗して」(『世界』1951年4月号)、「講和問題会議に寄す」(『世界』1951年10月号)等の文章に対して読者から寄せられた「山のような手紙」の中から38通を選んで編んだものである(編集を担当したのは当時要書房の社員であった安田武である)。梅本克己や石母田正といった名のある学者からの数通の手紙を除けば、すべて一般の読者からのものである。一例(G・H 教員 27歳)をあげよう。「時の権力に対して敢然としてその信念を吐露し、『日本人』の進むべき道についてするどい批判をあげ、その方向を明示しておいでになる清水先生、あなたこそは私たち民衆の代弁者であり、先駆者であります」(清水編 1951:109)。清水は「はしがき」の中で次のように書いている。「手紙の中には、ただ私の意見に賛成するという簡単な内容のものもある。それも収録した。私に対して過分の賛辞を与えて下さる方々もある。恥ずかしいと思いながら、しかし、私は、削らずに、そのまま収録した。敢えてこれを削らなかつたのは、この賛辞はただ私という人間そのものに与えられたのではなく、平和と独立のために多少の努力を重ねている限りの私に恵まれたものであると考えたからである」(清水編 1951:2-3)。

大宅壮一はさっそく『中央公論』1952年1月号の「教祖的人物銘々伝」の中で『聲なき民のこえ』を取り上げ、「共産主義の神々たちはすでに大部分地下にもぐって『黄泉国』の



支配者となってしまったが、最近『平和の神さま』ではなくて、『平和論の神さま』などというニュー・フェースも出現している。(中略)『生長の家』や『PL 教団』の機関紙で、この種の教祖へのファンレターをいつも読みなれている私には、全く奇妙な感じがする」(大宅 1952:161-2)と清水を揶揄した。これに対して清水は『婦人公論』1952年3月号の「教祖について」の中で、「大宅氏は、自由な放言の中に鋭い洞察を示す先輩であるだけに、正直のところ、この一言には私も少なからず閉口いたしました」と嘆息し、「私が教祖になったか否かは別として、現在の日本は、誰かを教祖に見立てねば納まらぬ空気が相当あります。私が教祖にならなくても、この調子で進めば、結局は、本当に素質のある誰かが教祖になってしまうでしょう」(清水 1952a:98)と、教祖をファシストに置き換え、ファシズムの再来(逆コース)に警鐘を鳴らしたが、自身の教祖性については正面から反論することを回避した。

実際、清水は自分が読者や聴衆から遊離した人間、一段高いところにいる人間として評されることを嫌った。不動明夫が『人物往来』1952年11月号の「批評家群を斬捨御免」の中で清水を取り上げて、「清水の文章が青少年に人気がある原因の一つは、その悲壮的なセンチメンタリズムに存する。青少年は利巧も馬鹿もセンチメンタルが好きである」(不動 1952:106)と批判したことを受けて、清水は自分が悲しい映画を見て涙を流しやすいセンチメンタルな人間であることを告白した上で、映画の中身(現代の諸問題)には触れないで、カメラが暗いとか、テンポが緩いとか、映画を技術的に語ることがプロの批評家(インテリ)の仕事なら、それは安易かつ愚劣なことだと断じ、「私は、批評家たちとは違って、とにかく、作品を事実の平面へ持って来て、そこで考えるという癖を持っています。つまり、世のミーチャンやハーチャンと同じなのかも知れません」(清水 1953a:66)と、自分は批評家(インテリ)ではないこと、読者と同じタイプの人間であることを強調した。

「ミーチャン、ハーハチャン」は「庶民」と言い換えることができるだろう。事実、清水は『展望』1950年1月号の「庶民」の中で、庶民の特性(組織に欠け、私的・日常的世界に埋没し、意志よりも感情が優先し、国民・臣民・人民などよりもずっと昔から存在する)を冷静に分析している途中、いささか唐突に、「私自身が庶民なのである。もとより微賤の生まれであって、庶民の哀歓は、本当のところ、一々この胸に堪えるのである。自らそれを知りながら、或いは知っているためか、却ってこれを知らぬ様子で文章を書き演壇に立っているのである。書いたり喋ったりする時に、自分が庶民であることを忘れるという滑稽な習慣は、何時の頃から、また如何なる原因から固定してしまったのであろうか。恐らくはこれは成り上がった独裁者というものの心理であるに違いない」(清水 1950:10)と、読者や聴衆を一段高い場所から見下してしまいがちな自分をセンチメンタルな口調で自己批判してみせた。引用中の「微賤の生まれ」という表現には注釈が必要である。清水は 1907

年(明治40年)東京市日本橋区薬研堀町の竹屋の長男として生まれたが、祖父の代までは旗本であった。清水が尋常小学校6年のとき、一家は家財道具を馬車に積んで、両国橋を渡って、本所区柳島横川町へ引っ越した。清水は尋常小学校を出てから、いったん商業学校へ進んだが、一学期で退学し、翌春、医者の子弟の集まる独逸学協会学校中学に入学。中学を4年で修了し、新設の東京高等学校に進み、そして1928年(昭和3年)東京帝国大学文学部社会学科に入学した。清水が大学に入学した年、一家は本所から東京府下雑司ヶ谷村に転居したが、清水は柳島の東京帝国大学セツルメントのセツラーとなって、労働学校で講義をするために本所に通った。大学卒業以降のことはすでに述べたが、こうした「下町 場末 郊外」という地理的移動と、「旗本の末裔 庶民 インテリ」という社会的移動を経験した清水は、没落士族の矜持と、江戸っ子の心情と、場末の住民の悲哀と、インテリの聡明さと後ろめたさを同時に兼ね備えた複雑な人間であった。清水が自己を「ミーチャン、ハーチャン」すなわち「庶民」と同定しようとしたのは、意識的か無意識的かは別として、マス・メディアにおける自己呈示の戦略であったと思われるが、清水にはインテリに対する憧れと嫌悪と同時に、庶民に対する愛着と蔑視があった(6)。

「私自身が庶民なのである」との告白を終えた後で、清水は再び庶民について冷静な分析を再開し、「専ら直接的接触の世界に住む人間の群れ」を「庶民」と名づける。そして庶民の住む直接的接触の世界は、ジャーナリズムが提供する情報から構成される間接的接触の世界と個人の内面の奥底の宗教的・哲学的領域との間の中間領域として、指導的言論の対象から取り残されてきたと指摘する。明治以来、次々に輸入されてきた「有名思想」は日本人の行動を規定することなく、実際の日本人の行動を規定してきたのは、庶民が直接的接触の世界で獲得してきたところの知恵、すなわち「匿名思想」だった。「しかし忘れてならぬ点は、庶民は自らその思想を表現せぬというところにある。(中略)庶民は黙っている。しかし庶民が黙っていると、外部の人々は、これが庶民の思想である、と書いてくれる。叫んでくれる。けれども庶民は黙っている。粗忽な人々は、庶民がこれを完全に受け容れたのだ、と思い込む。だがその代弁によって庶民の思想が完全に表現されたのではない。そういう機会は今までに一度も訪れなかったであろう」(清水 1950:14)。ここでは戦前・戦中の庶民を臣民としてとらえる思想(天皇制ファシズム)だけではなく、戦後の庶民を人民としてとらえる思想(マルクス主義)も批判の対象になっている。「庶民は戦前と同じように戦後もある。庶民は戦前と同じように戦後も無視されている。私はそう思う」(清水 1950:16)。「私はそう思う」と書くとき、清水には「有名思想」の輸入に一役買って来たインテリとしての反省だけでなく、「匿名思想」の完全な、とはいわないまでもよりよい理解者・代弁者になろうという決意と、自分にはそれが可能かもしれないという自負があったはずである。そうした決意と自負の背景には「人間的自然」(human nature)

についての長年にわたる研究（1951年刊行の『社会心理学』はその成果である）と、読者や聴衆の圧倒的支持があった。

#### 4 政党と労働組合

悲壮で孤独な「平和運動家」清水幾太郎を支えたのは、彼の読者だけではなかった。「平和運動家」が「平和運動家」であり続けるためには、不特定多数の読者の支持だけでは不十分であり、組織とのかかわりがどうしても必要である。

「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」の第10項に「平和のための教育」を掲げた平和問題談話会が日教組に働きかけを行ったことから、1949年の夏から秋にかけて、清水は談話会のメンバーと一緒に全国各地の日教組（日本教職員組合）主催の講演会を回っている。『世界』1949年7月号の座談会「平和のための教育」で司会を務めた清水は、座談会の最後に、教員の再教育の主体は日教組である点を指摘した上で、次のように述べている。「そういうところに学者たちが入ってゆくということは、単に教員の仕事に手を貸すという以上の、もっと積極的な事柄でなければならないと思われます。教職員の間になだかまっておるいろいろの問題にも、学者たちは活発な関心をもつべきですし、その解決のために力を尽くすことは、社会学者、自然科学者の任務の一つであるはずで」（清水他1949:48）。しかし、この「任務」には苦痛が伴った。当時の清水の日記には次のように書かれている。「昭和二十四年五月十日（火）朝、教育会館に日教組幹部を訪ふ。当方は、吉野源三郎、宮原誠一、小生。夏休みの講習会の件なり。下等な連中なのに驚く」「七月二十二日（金）九時、教育会館にて講演会（第一日）。参加人数僅か五十名ばかり。少なくとも六百名と幹部は約束したりしに、幹部も出席者も義理で動いているやうなものなり。だらけた空気。喋っている途中で馬鹿らしくなる。こんな semi-political activities は綺麗にやめて、黙って本を書くことだけで一生を使おう。もう厭だ」（清水1975[1993]:329-30）。「運動」と「研究」の間でのこうした揺れは、1950年代の清水に終始つきまわっていた（7）。

それでも清水が日教組との連携を続けたのは、教員の再教育の必要という以上に、「子供」が平和運動の国民的拡大のためのキーワードとして有効であったからである。『婦人公論』1951年12月号の「子供のことを忘れるな」の中で清水はこう述べている。「誰が何と言っても、子供たちは当事者なのです。子供たちは、単独講和、軍事協定、再軍備という問題に退引ならぬ関係を持つ当事者なのであります。事態がこのまま進めば、やがてこの子供たちは銃を持たされ、戦場へ駆り出され、そして生命を捨てることになるでしょう」（清水1951:61）。清水は1951年1月号から1956年1月号までの丸5年間、『婦人公論』に毎月文

章を書いた。最初の1年間は「家庭の話題から」というコラム名で、連載開始にあたっては、「私たちの周囲に起こるさまざまな社会的問題をとりあげ、夫人や令嬢のご意見をとりかわしながら、清水幾太郎氏が毎月わかりやすく解説と批判を執筆されることになった」という紹介文が付けられていた。「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」の第9項(民衆と政治家の啓蒙)と第10項(平和のための教育)に従って、清水は平和のための教育には婦人の啓蒙が必要と考えたのであろうが、こうした啓蒙的文章こそが清水の大衆的人気を支えるものであった。「子供」を全面に出すことによって婦人たちを平和運動に取り込むこと。そのためには日々子供と接している小中学校の教員たちとの連携は不可欠であった(8)。かくして清水は「子供のことを忘れるな」の中で日教組に次のような賛辞を送る。「現代の人類にとって、最大の幸福は平和にあります。(中略)この平和の価値を知っていればこそ、日本の教師の団体である日本教職員組合は、五十万の組合員を擁して、平和の運動の先頭に立っているのでありましょう」(清水 1951:63)。

ちょうど「子供のことを忘れるな」を書いていた頃であろう、1951年10月30日、清水は衆議院議員会館で開かれた左派社会党の会合に出席している。その6日前の10月24日に社会党第8回臨時大会があり、かねてより講和条約の賛否をめぐって対立していた党内左派(講和・安保両条約反対)と右派(講和条約賛成、安保条約反対)とが最終的に決裂し、左派社会党と右派社会党の二つの党に分裂していた。それよりさらに遡ること7ヵ月前の3月10日には、総評の第2回大会が開かれ、総評の左右両派が対立、左派が実権を握り平和四原則(再軍備反対、全面講和、中立堅持、軍事基地反対)が決定され、事務局長に高野実が選出されていた。自伝の中で清水は当時を回想して次のように書いている。「十月三十日の会合は、平和三原則(非武装中立、全面講和、軍事基地反対 筆者注)が敗れ、仲間が去った後の左派社会党が、今後の闘争方針を決定するに当って、彼らと同じ方向で動いているうちに『小さな人気者』になった私を招いたものであろう。同じ方向で動いて来ながら、私がマルクス主義者ではない点、学習院という少し特殊な学校の教師である点に　　そう言ってよいなら　　特別の利用価値があったのであろう。それぞれの大学へ戻っていく仲間から取残され、孤独になり悲壮になっていた私にしてみれば、国会の承認(講和・安保両条約は10月26日に衆議院で承認された 筆者注)によってオーソライズされた既成事実と戦って行く頼もしい仲間巡り合ったように感じたのであろう。しかし、それと同時に、私の立っていた舞台はグルリと廻った。(中略)平和問題談話会では、全面講和と社会主義は必ずしも結びつくものではなかった。しかし、今度は、両者は不可分のものになる」(清水 1975[1993]:349-50)。左派社会党ならびにその支持母体である総評(日本労働組合総合評議会,1950年7月結成)と深くかかわることで、彼の平和運動はより本格化すると同時に、より党派的なものとなっていった。「半分は自分で書いたが、他の半分

は誰か他人が書いたような文章」を清水は量産するようになる。

しかし、左派社会党 = 総評の広告塔としての役割を演じながらも、清水は組織との間に  
つねに一定の距離を保っていた。「半分は誰か他人が書いたような文章」ではあっても、少  
なくとも「半分は自分で書いた」のである。たとえば、『婦人公論』1952年12月号の「総  
選挙について」という彼の文章を見てみよう。これは同年10月1日に行われた第25回衆  
議院議員総選挙の直後に書かれたものである。「私は、まだ総選挙の昂奮から醒めきってい  
ないようです。私の心身には、どこか、昂奮の影が残っております。(中略)何が何でも、  
社会党左派を中心とする平和勢力を勝たせねばならぬ。そして、私は方々を飛び廻って演  
説することになってしまったのです」(清水 1952b:38)。選挙の結果は、左派社会党は議席  
を16から54に増やしたが、「平和勢力」の一翼を担う共産党は35あった議席をすべて失  
い、労農党も議席を7から4に減らした。つまり左派社会党は躍進したものの、「平和勢力」  
全体としてはプラス・マイナス・ゼロという結果になった(9)。「平和勢力」が全体として  
伸び悩んだ理由を清水は二つあげている。第一は、当初、再軍備に対して曖昧な態度をと  
ってきた右派社会党や、本来は再軍備賛成であるはずの自由党の候補者さえもが、選挙戦  
が進むにつれて、再軍備反対の国民的潮流に調子を合わせて再軍備反対を叫ぶようになり、  
再軍備に賛成か反対かが選挙の争点とはならなくなってしまったこと。「何を執行するか、  
ではなく、何を掲げたら票が集まるか、これが日本の保守政党に共通の戦法であります。  
議会政治や民主主義の顔に泥を塗る、というより、国民を馬鹿にしきった戦法であります。  
選挙のときは、再軍備反対でも絶対平和でも、何でも彼でも、とにかく、票を集めること  
だけを考えて、その後は、多数の上に居直って、再軍備促進であれ、戦争政策であれ、勝  
手なことをしようという腹なのです」(清水 1952b:39-40)。第二は、「平和勢力」の組織の  
問題。清水は左派社会党の躍進に対する総評の貢献を高く評価した上で、しかし、組合や  
政党という人工の組織は、自由党の支持基盤である農村や地方の小都市に古くからある緊  
密な人間関係と比べて脆弱であると指摘する。「平和勢力の側は、組織の問題をもっと深く、  
もっと人間的に考えねばならないと思うのです。進歩的な組織に属していない人間はバラ  
バラの個人だと考えたり、徳川時代以来の組織の中においても、投票の瞬間だけは進歩的政  
党に一票を投じ得ると考えるような暢気な考えを早くやめて貰いたいものです。(中略)進  
歩的勢力が員数や動員だけを考えている限り、徳川時代以来の組織は微動だにしないでし  
よう」(清水 1952b:42)。第二の点が左派社会党 = 総評に対する批判になっていることは誰  
にでもわかる。清水は組織とかかわりつつ内部批判が言えるだけの自由を保持していた(そ  
れは組織にとって清水が境界人であったからである)。注意すべきは、第一の点(選挙の戦  
略としての再軍備反対)も左派社会党 = 総評に対する牽制球であったことである。「票を集  
めるのに都合のよいスローガンを掲げる」のははたして保守政党だけの戦法だろうか、と

いう危惧が清水にはあったはずである。「はずである」と断定するのは、そのときすでに燃り始めていた内灘闘争の過程で清水の危惧が現実のものになったからである。

## 5 内灘闘争

1953年は清水にとって「内灘の年」であった。その1年間に清水は4回、内灘村に足を運んだ。ただし、最初の訪問（5月30日）より半年前の1952年11月29日、清水は岩波書店主催の文化講演会のために吉野源三郎や中野好夫らと一緒に金沢を訪れている（金沢市から内灘村までは北陸鉄道浅野川線で30分ほどの距離である）。金沢駅に着いたとたんに地元の新聞記者たちから「ウチナダをどう思いますか」と尋ねられた清水は、実は、「ウチナダ」が「内灘」という地名であることも、そこで米軍の砲弾試射場の設置に反対する運動が起きていることも知らなかった（清水 1975[1993]:355）。「しかし、新聞記者の話を聞いているうちに、あれこれと考え、平凡ながら、いっばし、意見を述べる元気が出てきた。というより、何とか話を繋いでいる間に、話すことを通じて、自分の意見らしいものが生まれて来たのである」（清水 1953c:65）。清水の意見の要点は二つ。第一に、禍根は講和条約と安保条約であり、両条約の廃棄までもっていかねばならないこと。第二に、基地反対運動は今後の平和運動の本筋となるものであること。「憲法擁護運動など、今までの平和運動は、とかく、インテリ中心の狭いものになり易かったが、基地反対の運動となれば、広く民衆の利害と精力とを吸い上げることができる一方、平和運動が本当の国民的規模の運動へ発展する条件も生まれて来る。即ち、基地反対の闘争は、民衆の日々の生活に根を下ろしながら、而も、日本の運命を握る両条約の廃棄と結びついている。私は、心中秘かに、これだ、と叫んだ」（清水 1953c:65-6）。全面講和という目標と、庶民の住む直接的接触の世界へのアプローチが、清水の中で、このとき結びついたのである。

しかし、結局、内灘闘争は敗北に終わった（10）。反対派は砲弾試射場の設置を阻止することはできなかった。闘争の過程で清水には二つの誤算があった。第一は、内灘村の中山又二郎村長の反発である。最初の内灘訪問（総評の視察団の一員として）のとき、清水は村役場で中山村長と会っている。清水の要約によれば、そのとき中山村長はこういった。「私は、勿論、接收には反対です。それはハッキリしています。しかし、これは内灘の問題で、あなた方の問題ではありません。承ると、日本中に沢山の基地があって、様々の問題を惹き起こしているそうですが、あなた方は自分の故郷に帰って基地反対の運動をなさったらよろしい。抑々、私は、あなた方のように、日本中の米軍基地の撤廃などということを考えているのではないんです。そうではなくて、ただ内灘は困る、何としても、内灘だけは困るという考えなのです」（清水 1953c:68）。中山村長の考え方は、簡単にいえば、

エゴイズムである。しかし、清水はそれをエゴイズムであるという理由で否定しなかった。むしろそれを闘争のエネルギーに変換しようと考えた。清水は『世界』1953年9月号の「内灘」の中で、こう提言した。「エゴイズムで良いではないか。エゴイズム以外に反対する原理がないとしたら、エゴイズムで良いではないか。(中略)結局、問題は、外部の人間がどうして村のエゴイズムに奉仕するかということだ。赤旗などは無用である。労働歌も邪魔である。ただ、謙虚に、着実に、このエゴイズムに仕えることである。この奉仕を黙々と続けていけば、エゴイズムの底で、村民たちは、誰が真実の味方であるかを知るであろう。そして、きっと、エゴイズムを乗り越えた広い見地に抜け出るのである(清水 1953c:70)。おそらく清水はエゴイズムを「匿名の思想」の一形態と考えたのである。しかし、中山村長は『世界』1953年11月号の「清水氏の『内灘』を読んで」の中で、「清水氏のご自分の主張、アメリカ追払いの線に専ら忠実であり、『主義主張のために内灘村は闘争せよ』と言われることが、已に清水氏が御自分の主義主張のためエゴイズムに陥っていられるのではないか。御自分のエゴイズムを棚上げにして、内灘村はエゴイズムだと仰られるのが私には受取れない」(中山 1953:82)と清水を批判した。清水は『世界』の同じ号の「中山村長への手紙」の中で、「二三の方面からの批評ないし非難は覚悟しておりましたが、正直のところ、あなたからの非難だけは予想しておりませんでした」(清水 1953d:87)と嘆いた。「エゴイズム」という負のラベルを用いたのが裏目に出たのだろうが、とにかく清水は「匿名の思想」を代弁することに失敗したのである。

第二の誤算は、左派社会党の運動方針である。2回目の内灘訪問は6月28日。闘争資金として工面した5万円を持参している。その2週間前の6月15日、試射場内に座り込んでいた漁民たちが警官隊によって排除され、試射は再開されていた。「あの日に、どうして、先生は来てくれなかったのです」と村民は口々にいった(清水 1975[1993]:365)。その日、清水は自宅の病床で試射再開のニュースを聞いていたのであるが、左派社会党も総評もやはり組織的な支援行動には出なかったのである。「小さな革命を平気で見殺しにする社会主義政党というものがあるなら、その政党は、断じて、大きな革命を成就することは出来ない。小さな関ヶ原を一つ一つ見逃して、いつか大きな関ヶ原が現れるであろうと考えている社会主義政党は、愚鈍か、卑怯か、何れにせよ、社会主義などと縁のある代物ではない」(清水 1953c:77)。3回目の内灘訪問は7月19日。午前中に兼六園で日教組主催の軍事基地反対国民大会が開かれ、清水は来賓の一人として出席した。大会では来賓として招かれた諸党派・諸団体の代表たちの紋切り型の挨拶が続き、内灘村および隣接町村の人びとからの度重なる緊急動議はまったく取り上げてもらえなかった。清水は司会者に村民たちに発言する機会を与えてやるように進言したが、聞き入れてもらえなかった。閉会が宣せられ、参加者たちは50人ずつのグループに分かれて、30分間隔で発車する電車に乗って内

灘を向かうことになった（清水 1975[1993]:366-7）。なぜ最初から大会を内灘で開かないのか、なぜ一万人を越える参加者のエネルギーを分散するようなことをするのか、清水には理解しがたいことだったが、主催者はデモ隊が暴徒化すること（それは当時の共産党の術中にはまることであった）を回避したのである。大会は退屈な儀式となり、デモはピクニックのようなものになってしまった。清水は「内灘」の中で、左派社会党の方針に苦言を呈した。「一方、多少唐突であるにせよ、村民と共に戦いの日々を過ごしている連中（共産党の工作員たち 筆者注）を切り捨て、他方、改進黨（4月の参議院選挙で同党の井村徳二が内灘接収反対を主張して当選した 筆者注）を切り捨てるとすれば、後に残るのは左派社会党などを中心とする勢力になる。この残余の勢力は、大会の大勢を制することは可能であっても、同じ調子で内灘の問題そのものを解決することは出来まい」（清水 1953c:80）。4回目の内灘訪問（9月14日）には左派社会党委員長鈴木茂三郎が初めて同行したが、清水の気持ちはもうすっかり冷めていた。当日の清水の日記。「余曰く、『もっと早く此処へ連れて来たかった。あなたは、村が大黒柱、と言うが、政党も、もう一本の太い柱ではないのか。』……みやば旅館に戻る。人々集まる。五時のNHKニュースにて、上京中の中山村長と政府との間で内灘問題妥協の由を知る。一切終わる」（清水 1975[1993]:367）。長らく続いていた村民の着弾地点への座り込みもこの日をもって終わった。

「私は再び孤独になり悲壮になっていった」（清水 1975[1993]:368）と清水は自伝の中で当時の心境を語っている。平和問題談話会の「会議室の平和運動」から左派社会党＝総評の「現場の平和運動」へ清水は移ったつもりでいたが、「現場の平和運動」と見えたものは実は見せかけで、選挙のときに再軍備反対を叫ぶ右派社会党や自由党の候補者と同じく、徹底した議会主義を唱える左派社会党にとっては「現場の平和運動」は選挙のための手段にすぎないことに清水は思い至る。折りしも11月8日に左派社会党綱領の草案が発表され、その批判として清水慎三私案が発表されたことで、綱領問題は社会党が左右に分裂して以来の混乱を左派社会党にもたらしていた。『中央公論』1954年1月号は「大衆は左派社会党に要求する」という特集を組み、清水は「わが愛する左派社会党について」を書いた。清水は綱領草案の「日常闘争における党員の誠実、規律、勇敢、忍耐、献身なくしては、労働者、農民、小経営者、知識人、学生主婦等の党に対する信頼を獲得することはできない」という下りを引いて、「私は、内灘で、右の要求ないし規定と正反対のものを来て来た」（清水 1954:157）と内部告発を行い、「共産党との間に何等かの程度の共闘が生まれて、これを毛嫌いせず、むしろ、共産党の間で、民衆に対するサービス競争を試み、現地の闘争で着実な実績を挙げることによって、広汎な組織を作ること」（清水 1954:163）を提言した（11）。



清水のこうした批判を受けて、左派社会党は翌月の『中央公論』に「清水幾太郎氏の愛情にこたえて」と題する反論を寄せた。「清水幾太郎氏にとっては、かつての『メーデー事件』(1952年、講和条約・安保条約発効直後のメーデーにおいて、皇居前広場でデモ隊と警官隊が衝突し、2名の死者と、1000名を越える検挙者を出した事件 筆者注)による混乱も革命であれば、内灘の闘いも『小革命』である。一等寝台車の温かい毛布の中で『革命』の大演説の構想にふける高級で『進歩的』インテリにとっては、一切が革命に見える。清水氏が可愛い沢山のミイちゃんやハアちゃんを前にロマンティックな『進歩的』大演説をされる時には、氏の姿が氏自身にとって『革命家』に見える(中略)。組織的な基盤のないインテリや、半プロは組織の中でじっくりと闘争を組み立てることを好まない。メーデー事件が例の『アカハタ』の自己批判で『革命』でないことになると、にわかに興奮が冷めて、思想の季節的出稼人たちは、世の視聴を浴びた内灘へ移動しはじめた。清水幾太郎氏もその一人である」(左派社会党政策委員会 1954a:54)。おそらく左派社会党にとって清水幾太郎という人物は痛し痒しの存在であったのだろう。その抜群の知名度は総選挙での左派社会党の躍進に大いに貢献したに違いない。同時に、運動のための文章を書くときも「半分は自分が書いた」文章、すなわち党の方針に対して注文や批判を込めた文章を書く清水をうとましく思っていた人間は少なくなかったろう。「清水幾太郎氏の愛情にこたえて」は左派社会党政策審議会の名前になっているが、実際にこれを書いたのは、左派社会党の理論的支柱で九州大学教授の向坂逸郎だといわれている。向坂(=左派社会党)は清水に対して「思想の季節的出稼人」という侮蔑の言葉を浴びせた。

清水は『婦人公論』1954年1月号から彼にとっての2冊目の自伝『私の心の遍歴』(1956)の連載を開始していたが、その5回目(同年5月号)「憧れの避暑」は、「わが愛する左派社会党について」と「清水幾太郎氏の愛情にこたえて」の応酬が行われた直後に書かれたものである。清水が小学校3年生の夏休みに、初めて両親のもとを離れて、隣家の医者家族と一緒に彼らが経営する福島県横向温泉の旅館に滞在したときの話で、便所紙が大きな落の枯葉であったり、食事が貧しいことに閉口したという話が続いた後に、次のような記述が来る。「宿に着いて、いろいろの事情が判って来るにつれて、私は自分の立場がないことに気がつきました。この宿にいる人間は、滞在客か、医者家族か、その使用人か、この三種類なのですが、私だけはそのどれにも入らないのです。(中略)私は、一体、何者なんでしょうか。私は、どこにいても邪魔なような気がして来ました」(清水 1954b:79)。結局、2週間ほどして父親が迎えに来てくれて、清水は東京に帰ることができた。「他人の眼から見れば、これは誠に小さな事件です。けれども、九歳の私にとっては、実に大きな事件でした。これは、後に関東大震災に遭ったり、徴用員としてビルマへ連れて行かれたりしたのに劣らぬ大事件でした」(清水 1954b:81)。しかし、関東大震災やビルマでの体験

は最初の自伝『私の読書と人生』でも、3冊目の自伝『わが人生の断片』でも語られているのに、この横向温泉での出来事は2冊目の自伝でしか語られていない。その理由はこの出来事のもつ意味に関係がある。「この大事件のために、私は一層臆病になってしまったようです。ウカウカと見知らぬ世界へ踏み込んだら、どういうことになるか、それを身にしみて感じたのでしょう。とにかく、すっかり臆病になりました。(中略)今でも、時々、横向温泉の夢を見ます」(清水 1956[1992]:283-4)。自伝を書くという行為は過去の人生の模写ではなく抽象である。無数にある過去の出来事の中からどの出来事を抽出するか、それを決めるのは自伝を書いている時点の著者の意識である。『私の心の遍歴』の連載を開始したときの清水は、まさに「ウカウカと見知らぬ世界へ踏み込んだら、どういうことになるか、それを身にしみて感じ」ていたに違いない。そうした思いが、記憶の底に沈んでいた子供時代の孤独な経験を呼び覚まし、それを書かせたのである(大久保 1997)。

4回目の内灘訪問から3年5ヵ月後の1957年2月15日、清水は5回目の、そして最後の内灘訪問を行っている。同年1月末をもって内灘試射場は接收が解除され、村に返還されていた。返還の内示が出るや、村内に接收継続(=補償の継続)を求める声上がり、ジャーナリズムはこうした動きを恥ずべき行為として非難する一方で、闘争当時、「村民の意に反して」彼らを闘争に駆り立てた政党やインテリに反省を迫った。そうした中での内灘訪問であった。このとき清水は砂川町基地拡張反対同盟から「祝内灘基地返還」と書かれた赤旗と、「内灘のお兄さま」宛の行動隊長青木市五郎の手紙を託されている。『世界』1957年4月号の「最近の内灘」はこの最後の訪問を終えて書かれたものである。この中で清水は何人ものジャーナリストが内灘を訪れて、村長や元村長にインタビューしただけで、内灘の庶民の真実の声を聞いたつもりになっていることを問題にしている(きだ 1957;丸山 1957;大宅 1957)。「なるほど、風俗や住居などから見れば、彼等は立派な庶民に見えるであろう。しかし、村の現実の中では、彼等は天皇なのである。東京の評論家の眼に庶民の一人として映るであろうが、村の生活では決して庶民ではない。それに加えて、彼等は、評論家や新聞記者など到底齒の立たない政治家なのである。とりわけ、接收に関する諸問題が彼らを立派な政治家に鍛え上げてしまったのである」(清水 1957a:222)。少なくとも清水はまだこのとき「庶民」という概念を見捨ててはいなかった。かつて「匿名の思想」(庶民の思想)の一形態であるエゴイズムを基地反対闘争のエネルギーに変換しようと試みて、中山村長の反発を買ったが、あれは村長が庶民ではなかったからだという説明が成り立つ。庶民の平面に立った平和運動の組織論は清水の中でまだ揺らいではない。「最近の内灘」と時期を同じくして『中央公論』1957年4月号に書いた「ウチナーダとスナカーワ」の中で、清水は「いろいろな失敗や迂路はあっても、日本の平和運動は次第に発展して行くと思う」(清水 1957b:198)と述べている(12)。清水が平和運動から身を引くのは

60 年安保闘争の敗北という政治的要因のためであり、「庶民」という概念に見切りをつけるのは高度成長という経済的要因のためである。しかし、1957 年の清水にとって 誰にとっても 未来は深い闇の中にあった。

注

( 1 ) 『清水幾太郎著作集 19』( 講談社、1993 年 ) の「著作目録」を参照。

( 2 ) 購入申込用紙付きの宣伝用パンフレットを見ると、『清水幾太郎集』には「平和運動家」清水幾太郎の文章は 1 篇も収められる予定がなかった。一方、最後の話題作『日本よ国家たれ』( 1980 ) も入っていないことを考えると、清水は「平和運動家」としての自己だけでなく、「右翼のイデオログ」としての自己も退けたかったのではなかろうか。

( 3 ) 筆者は拙稿「忘れられつつある思想家 清水幾太郎論の系譜」( 1999 ) で、清水がどう論じられてきたかを論じた。本稿は清水自身の ( 1950 年代前半の ) 言動を分析して彼の思索と行動の軌跡をいわば「内側から」理解しようとするものである。なお、清水幾太郎を正面に据えた研究は単行本のレベルでは以下の 2 冊があるのみ。

天野恵一、1979、『危機のイデオログ 清水幾太郎批判』批評社

小熊英二、2003、『清水幾太郎 ある戦後知識人の軌跡』( 神奈川大学評論ブックレット 26 ) お茶の水書房

( 4 ) ただし、ことはそう簡単ではなかった。平和問題談話会のメンバーには政治的には与党的な人びとも少なからず含まれていたからである。そのため声明には次のような「補足」が付けられていた。「既に明らかなごとく、右の『声明』は、全面講和への要求を以って主要内容とするものである。同時に、われわれの間には同じく平和への意志と愛情とに導かれつつ、而も単独講和に少なからぬ意義を認める人人がある。われわれはこの意志と愛情とを相互に信じつつ、種種の論点について十分な考慮を払った。」つまり平和問題談話会それ自体が「二つの世界の平和的共存」の実践なのであった。

( 5 ) 清水の自伝には、当日、「安倍能成氏が議長になり、その横に私は坐らされた」( 清水 1975[1993]:323 ) とある。「後ろ」と「横」では意味合いがかなり異なる。「後ろ」のことを清水が「横」と表現したのか、それとも最初は「後ろ」に座っていた清水が、声明文の検討が開始されるときに安倍に促されて「横」に移動したのかもしれない。

( 6 ) 後に清水は蔑視の対象としての庶民を「大衆」の名称で呼ぶことになる。安保闘争後、「平和運動家」から「学者」となった清水の代表作の一つ、『倫理学ノート』( 1972 ) は次のような一文で終わっている。「飢餓の恐怖から解放された時代の道徳は、すべての『大衆』に『貴族』たることを要求するところから始まるであろう。しかし、それが不可能であるならば、『大衆』に向かって『貴族』への服従を要求するところから始まるであろう」

(清水 1972:327)。高度成長は庶民を大衆に変えた。あるいは清水の庶民についての認識を変えたのである。

(7)次の清水の文章は、当時の日記でもなく、はるか後になってからの回想でもなく、運動の渦中に身をおいているときに発表されたものである。「今の僕は勉強したい一心だ。十日間も地方を飛びまわっていると、たまらなく書齋が懐かしくなってくる。懐かしくなってくるというとのんきだが、じつは、大切な研究を放擲しているという罪悪感に悩まされるのだ。特に、旅行の終わりごろになると、もう息苦しくなってくる。書齋一筋、研究室一本槍でやっている友人が羨ましくなる。自分は何という愚かな人間なのであろう。それで家に帰りつくと、疲れた体で勉強を始める。ところが、そのうち、ある基地でこういう問題が起こっている、ぜひ、来てもらいたい、というような手紙が舞いこんで来る。それをことわって、勉強を続けるのには、他人に対してよりも、自分自身に対して弁明が要る。しかし、こうした手紙がある程度までふえてくると、今度は新しい罪悪感が頭をもたげてくる。こんな時代に机にかじりついていることが許されるのであろうか。この息苦しさが昂じてくると、仕事を投げ出して、飛んで行ってしまふ。思えば、時計の振子のような動作を何べん繰返して来たことであろう」(清水 1955:118-9)。「現場」と「書齋」という二つの場所、「運動」と「研究」という二つの活動の間で揺れる自身の気持ちを正直に告白している。悲壮でヒロイックな文章の中に、「平和運動家」であり続けることの矜持と、精神的破綻への不安を読み取ることができよう。こうした矜持と不安を抱えたまま、清水は60年安保闘争へと突入していったのである。

(8)清水幾太郎・宮原誠一・上田正三郎共編『基地の子』(1953)と清水幾太郎・木村禧八郎・猪俣浩三編著『基地日本』(1953)は、清水と日教組とのこうした連携から生まれた。前者は日本全国の基地のある市町村に住む小中学生の作文200点(73校)を編んだもので、子供の目を通して見た基地社会の様子が綴られている。後者は1953年1月の日教組の第2回全国教育研究大会で発表された基地社会の小中学校の教員によるルポルタージュである。基地問題はさまざまな側面からなるが、2冊の本において基地問題の全体を象徴するキーワードは「子供」と「パンパン」(米兵相手の日本人売春婦)である。すなわち「子供」は基地の犠牲者であり、「パンパン」は基地と地域社会のしがらみの体现者である。

(9)共産党が全滅したのは、前年10月の第5回全国協議会で当面の革命を民族解放民主革命と規定した新綱領を採択し、火炎ビンなどによる武装闘争で国民の支持を失ったからである。清水は共産党の全滅については「どうしても腑に落ちない」「全く意外」としか述べていないが、翌年4月19日に行われた第26回総選挙の結果を受けて書いた『婦人公論』1953年6月号の「再び総選挙について」の中では、「正直のところ、現在の私には、どうしても、こんなに成績が悪いのか、十分の原因を見出すことができません。何れにせ

よ、共産党の諸君はこの原因を支配階級側の策謀や宣伝に帰することなく、自分自身に向かって、謙虚に研究してみる必要があると信じます」(清水 1953b:65)と述べている。その後、共産党は 1955 年 1 月 1 日付の『アカハタ』で極左冒険主義を自己批判し、同年 7 月の第 6 回全国協議会で自己批判と再出発のための新方針を発表した。

(10) 本稿では、紙幅の制約上、内灘闘争全体の経緯について細かく述べることはできない。内灘闘争の記録としては次の 4 冊が詳しい。

神田正男・久保田保太郎, 1953, 『日本の縮図 内灘』社会書房

北陸政治経済研究所編, 1954, 『内灘』勁草書房

中山又二郎, 1963, 『内灘郷土史』内灘町役場

内灘闘争資料集刊行委員会, 1989, 『内灘闘争資料集』

(11) 清水が左派社会党に共産党との共闘を呼びかけたのは、基地反対闘争にとって有効だからであって、共産党の方針に賛成だからではない。どのようなイデオロギーの持主が「座り込み」を行おうと、「座り込み」は抵抗の手段として有効だと清水は考えていた。都築勉は「内灘の闘争を通じて、仮に清水が共産党にシンパシーを感じたとしても、それは同党の方針に共鳴したからというより現地で活動する学生党員の姿に共感したからではないかと思われる」(都築 1995:186-7)と述べているが、確かに清水は右であれ左であれ「ひたむきな青年」の姿に感動するメンタリティーの持主であった。

(12) 「日本の平和運動は次第に発展して行くと思う」というのは平凡な発言のように聞こえるかもしれないが、前年に起こったスターリン批判(2月)、ポーランド暴動(6月)、ハンガリー動乱(10月)といった一連の事件を踏まえた上での発言であることを考えると、ここに清水の戸惑いと、その戸惑いを振り払おうとする気持ちを読み取ることができる。後に清水は自伝の中でこう書いている。「思想的というか、そういう方面でも私は行き詰っていた。もっとも、私は、元来、我流のプラグマティズムを密かに信条としているので、何事も一元論的に説明せねば気が済まぬとか、システムが整わぬと満足しないとか、そういう気持ちを全く持っていない。その由来が何であれ、当面の問題の処理に役立つ道具とみえたら、どんな観念でも借りて来るという行き方であるから、こういう散漫な流儀で行くと、多少の事件が起こっても、思想的な行き詰まりというほどのものは起こらない。しかし、そういう私にとっても、戦後の いや、戦前からの インテリの常識の或る部分は、謂わば公理のようなものになっていた。それが、昭和三十二、三年の頃、疑わしいものに見えて来た。それは、歴史的時間が資本主義から社会主義へ向かって流れるという常識であった」(清水 1975[1993]:434)。

引用文献

- 不動明夫,1952,「批評家群を斬捨御免」,『人物往来』11月号:102-6
- 平和問題談話会,1949,「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」『世界』3月号:6-9  
    ,1950a,「講和問題についての声明」『世界』3月号:60-4  
    ,1950b,「三たび平和について」,『世界』12月号:21-52
- きた・みのる,1957,「内灘という新気違い部落」『文藝春秋』3月号:112-25
- 丸山邦男,1957,「内灘を彌次るな」『中央公論』3月号:194-204
- 緑川亨・安江良介,1985,「平和問題談話会とその後」『世界』創刊40周年記念臨時増刊号:  
    54-97
- 中山又三郎,1953,「清水幾太郎氏の『内灘』を読んで」『世界』11月号:78-82
- 大久保孝治,1997,「自伝の変容 清水幾太郎の3冊の自伝をめぐって」『社会学年誌』38:  
    103-20  
    ,1999,「忘れられつつある思想家 清水幾太郎論の系譜」『早稲田大学大学院文  
    学研究科紀要44輯 第一分冊』:133-48
- 大宅壮一,1952,「教祖の人物銘々伝」『中央公論』1月号:160-4  
    ,1957,「内灘 その得たもの、失ったもの」『週刊朝日』3月3日号:32-4
- 左派社会党政策審議会,1954,「清水幾太郎氏の愛情にこたえて」『中央公論』3月号:54-63
- 清水幾太郎,1950,「庶民」『展望』1月号:6-16  
    ,1951,「子供のことを忘れるな」『婦人公論』12月号:60-63  
    ,1952a,「教祖について」『婦人公論』3月号:98-79  
    ,1952b,「総選挙について」『婦人公論』12月号:38-43  
    ,1953a,「インテリについて」『婦人公論』4月号:64-8  
    ,1953b,「再び総選挙について」『婦人公論』6月号:63-7  
    ,1953c,「内灘」『世界』9月号:65-80  
    ,1953d,「内灘村長への手紙」『世界』11月号:87-102  
    ,1954a,「わが愛する左派社会党について」『中央公論』1月号:150-70  
    ,1954b,「私の心の遍歴 あこがれの避暑」『婦人公論』5月号:76-81  
    ,1955,『日本が私をつくる』光文社  
    ,1957a,「最近の内灘」『世界』4月号:217-23  
    ,1957b,「ウチナーダとスナカーワ」『中央公論』4月号:193-9  
    ,1972,『倫理学ノート』岩波書店  
    ,1975,『わが人生の断片』文藝春秋(『清水幾太郎著作集14』,1993,講談社)
- 清水幾太郎他,1949,「平和のための教育 座談会」『世界』7月号:24-48
- 清水幾太郎編,1951,『聲なき民のこえ』要書房

清水幾太郎・宮原誠一・上田正三郎編,1953,『基地の子』光文社  
清水幾太郎・木村禧八郎・猪俣浩三編,1953,『基地日本』和光社  
清水礼子,1992,「解題」『清水幾太郎著作集 10』講談社:423-51  
鈴木広,1990,「清水幾太郎私論」『社会学評論』160 第 40 卷 4 号:414-30  
都築勉,1995,『戦後日本の知識人 丸山真男とその時代』世織書房  
吉野源三郎,1976,「戦後の三十年と『世界』の三十年」『世界』1月号:253-82

\* 本稿は『社会学年誌』45号(早稲田社会学会、2004年3月25日発行)に掲載された。